



映画祭でつながるミャンマーと世界

ポスト軍政期の新展開

長田 紀之

はじめに

2011年、長期にわたる軍事政権が終わり、ミャンマーに新たに「文民」政権が発足した。以来、ミャンマーの映画界は活気づいている。軍服を脱いだ元軍人たちの政府のもと、欧米との関係改善を狙った改革が行われ、表現の自由が拡大したからである。そうした流れのなかで、ここ数年、ミャンマー国内では次々に映画祭が生まれてきた(資料参照)。軍事政権下のミャンマーでは考えられなかった新しい現象といえるだろう。この小文では、映画祭というキーワードから見えてくる近年のミャンマー映画事情の紹介を試みたい。

映画祭ブームの到来

ポスト軍政期のミャンマーで映画祭開催の先駆けとなったのがワタン映画祭である。まだ新政権のもとで事態がどのように移り変わっていくのか誰も確信をもって予測できなかった時期に、後述するヤンゴン映画学校の卒業生で欧州留学から帰国したばかりの若手映画人トゥートゥーシェイン氏やタイッディー氏らが中心となって企画した。記念すべき第1回目は、2011年9月、同国の旧首都であり今も最大の人口を擁する中心都市ヤンゴンで、企画者たちの留学先であったチェコのプラハ芸術アカデミー映像学部(FAMU)と現地のフランス文化機関アンスティチュ・フランセの協力を得て催された。ちなみにワタンとはパーリ語起源の仏教用語で雨安居を指す。ミャンマーで多数派の人々に信仰されている上座仏教では、雨季の間、僧侶たちは遊行をやめ、僧院に留まって修学することになっており、その期間を雨安居という。ワタン映画祭はその名の通り毎年雨季の9月に開催され、2015年に第5回目を迎えた。現在、チェコのFAMUのほか、日本の国際交流基金やドイツ文化機関ゲーテ・インスティトゥート、オランダのアムステルダム国際ドキュ

資料 ポスト軍政期ミャンマーの主要な映画祭¹⁾

名称	開催年次
ワタン映画祭	2011~2015 (5回継続中、毎年9月開催)
自由芸術映画祭	2012, 2013 (全2回、毎年1月開催)
人権と人間の尊厳の国際映画祭	2013~2015 (3回継続中、毎年6月開催)
アンド・プラウド・ヤンゴン LGBT映画祭	2014~2015 (2回継続中、毎年11月開催)

出典 各映画祭ウェブサイトなどから筆者作成

メンタリー映画祭(IDFA)がオフィシャル・パートナーとなっている。

ワタン映画祭のメインイベントは短編映画のコンペティションで、応募作品の尺は30分までと定められている。毎年、ある程度絞り込まれた数の上映作品の中からフィクション、ドキュメンタリー、その他の映像作品の3部門の最優秀作品にそれぞれ賞が与えられる。映画祭を創設した先の2人の言によれば、短編に限定しているのは財力の乏しい現地の自主制作映画を奨励するためであるという(Tin Htet Paing 2015)。依然としてミャンマーでは、このような自主制作映画を上映する場所や機会が限定されている。テレビ放送や一般の映画館にかかる映画は、コメディや恋愛ドラマといった大衆娯楽的なものが主流である。これに対して、ワタン映画祭では応募作品に主流の映画とは違った独自性を求めている。

第1回ワタン映画祭以降、続々とヤンゴンで映画祭が開催されるようになった。

2012年1月には、ミャンマーの独立記念日に合わせて、自由芸術映画祭が開催された。これは軍事政権下で民主化運動の象徴的な存在であった政治家のウンサンサーチャー氏やコメディアンズのザーガナー氏の関与のもとで、映画監督のミインティンコーコー

1) この他に世界の古典的映画を上映する「メモリー! 国際映画遺産祭」が定期的に開催されている。同映画祭は第1回を2013年にカンボジアのプノンベンで開催した後、第2回(2014年10-11月)、第3回(2015年5-6月)をヤンゴンで開催した。第4回もヤンゴンで2016年11月に開催予定。

氏らが企画した映画祭であった(長田 2013)。自由芸術映画祭は、管見の限り、翌年の第2回目を最後に開催されていない。おそらくその年の6月から新たに始められた別の映画祭——人権と人間の尊厳の国際映画祭(以後、人権国際映画祭)——に発展的解消を遂げたものと思われる。両映画祭の間には、組織主体と理念の双方において強い連続性が見られる。後者の仕掛け人もやはりミンティンコーコーダー監督であったし、毎年開催時期はアウンサンスーチー氏の誕生日に合わせられた。

人権国際映画祭が、以前の自由芸術映画祭と大きく違うのはその規模と国際性である。両映画祭をミンティンコーコーダー氏とともに組織したモンモンミャツ氏は、ある人物との出会いが新しい映画祭を作るきっかけであったと述べている。イゴル・ブラジュヴィチュ氏——チェコ共和国プラハに拠点を置くワン・ワールド国際人権ドキュメンタリー映画祭の創設者である。この人物の参画により映画祭は国際化し、各国の大使館や援助機関・文化機関などから支援を得て規模を拡大させた(Mon Mon Myat 2015)。3年目となる2015年には、アメリカ、カナダ、イギリス、ノルウェー、スウェーデン、オランダ、ドイツ、チェコ、ポーランド、イスラエルの公的機関13組織、2つの国際映画祭、現地のホテルやマスコミなど私企業8社、学生組織1つがパートナー欄に名を連ねている。

人権状況改善のために映画祭を活用するという手法は、2014年から始まったアンド・プラウド・ヤンゴンLGBT映画祭でも見られる。性的マイノリティ(LGBT)に対する偏見が強いミャンマーで、彼/彼女らの権利擁護や一般社会に向けた啓蒙活動を行っていた複数の現地組織が中心となって生み出した映画祭である。デンマーク、スウェーデンの大使館を含む海外からの8組織が後援しており、開催場所はヤンゴンのアンスティチュ・フランセの敷地が提供されている。

いずれの映画祭においても、上映作品はやはり30分以内の短編作品がほとんどである。また、それぞれの映画祭は回を重ねていく間に、写真展や音楽祭といった関連イベントの開催や地方への巡回上映など、活動の幅を広げている。

人がつなく、人でつながる

映画祭が陸続と企画されること自体はポスト軍政期の新しい現象であるが、それを生み出した下地はよ

り長い時間をかけて準備されていた。その下地とは人である。例えば、軍事政権時代にも、映像を武器として政治的主張を行う人々がいた。「サフラン革命」とも呼ばれる2007年の反政府デモの際、身の危険を冒してこのデモの光景を記録し、海外に伝えたビデオジャーナリストたちの姿は、翌年に公開されたアンドレス・オステルガルド監督のドキュメンタリー映画『ビルマVJ:消された革命』(英語題:Burma VJ: Reporting from a Closed Country、制作:デンマーク)に描かれている。

映像制作のより芸術的な側面について、人材育成の一角を担ったのがヤンゴン映画学校であろう。ヤンゴン映画学校はドイツのベルリンに本拠を置くNPOで、英系ビルマ人(アングロ・バーミーズ)の出自を持つリンジー・モリソン氏が軍事政権時代の2005年に設立した。当時、ミャンマー国内には映像作品の制作について十分に学べる場所がなかったため、諸外国から講師陣を招いてヤンゴンでワークショップを開催したのである。ヤンゴン映画学校でのトレーニングの特徴はドキュメンタリーの重視にある。約1ヶ月間のワークショップで、参加者たちは身近な素材を取り上げ、それを協働で何本かの短編ドキュメンタリー作品に仕上げてゆく。2年目からは初学者向けのコースに加えて、参加経験者向けの上級コースも開講した。さらに順次、脚本執筆、撮影、編集に特化したコースなども開講していった。

2005年以来、ヤンゴン映画学校は着実に発展を遂げてきた。公式ウェブサイトには2007年から2014年までの年次報告書が載せられている。それらによると、2007年に年間の受講生数36人、ワークショップの開講数3コース、成果物としての映像作品15本、脚本9本であったのが、2014年にはそれぞれ65人、15コース、24本、14本となっており、事業が拡大していることがうかがわれる。また、2014年時点で映画業界に携わっている卒業生の数は107人であった。

このようにヤンゴン映画学校から毎年輩出されてゆく若い映画人たちが、2011年以降、花開いた映画祭ブームを牽引している。上述の通り、このブームの火付け役となったワタン映画祭を企画したのもヤンゴン映画学校の初期の卒業生たちであった。さらに、国内で開かれる映画祭の上映作品や受賞作品のうち、同校の受講生や卒業生の手になるものがつねに一定数を占めている状況がある。例えば、2014年の人権国際映画祭の8つの賞のうち2冠を勝ち取ったサイコ

ンカム監督は、2011年にヤンゴン映画学校のワークショップに参加している。受賞作の『This Land Is Our Land』は、政府による土地接収や開発政策、急速な自然環境の変化などの影響を被りながらも土地に根を張り生き続けている人々の姿に迫ったドキュメンタリーである。

ところで、サイコンカム氏は2013年に十年來の友人3人と一緒に映画制作会社タグフィルムズを立ち上げた。タグフィルムズはアンド・プラウド・ヤンゴンLGBT映画祭の公式パートナーでもある。このタグフィルムズの創設メンバーの1人であるラミンウー氏は、留学先のアメリカで哲学と心理学を専攻した後、同地での数年間の勤務経験を経て帰国したところ、高校の同窓のサイコンカム氏に誘われてタグフィルムズ設立に加わった(Rhoads 2015)。映像の仕事に就くのは初めてであったにもかかわらず、その後、ラミンウー氏はドキュメンタリー監督としての才能を発揮する。2015年の第5回ワタン映画祭では、サッカー狂の経営者のもとでの漁港労働者たちの働きざまをコミカルに切り取った『The Special One』で最優秀ドキュメンタリー映画賞を授与された。

ポスト軍政期の映画祭は映像表現に関心を持つ多様な人々のプラットフォームとなっている。そうした場の形成に一定の役割を果たしているヤンゴン映画学校にしても、その実態は年に数回のワークショップであり、恒常的な組織体というよりは、様々な作り手たちが各々の関心を持ち寄って集う一時的な学びの場といえそうである。軍事政権時代から幾筋もの伏流のように存在してきた映像の作り手たちの動きが、映画祭という場を得たことによって一つの目に見えるうねりとなり、より広い社会の関心を引きつけることで映画祭をいっそう盛り上げているように思われる。そこに集う人々の間には、主流の大衆娯楽映画とは一味違った批評性や芸術性の重視という共通認識があり、その認識のうえに立って、比較的制作しやすい短編ドキュメンタリーの形式で作品が多産されるという状況が生まれているのであろう。

越境するミャンマー映画

国内の映画祭が軌道に乗るにつれ、そこで評価を得た短編作品が海外の国際映画祭にも数多くかかるようになった。なかには海外で高い評価を得た作品もある。例えば、シンデウイー監督による2014年制作の

短編『Now I'm 13』は、マレーシアのコタキナバル国際映画祭でドキュメンタリー部門の銀賞を授けられた。ヤンゴン映画学校のワークショップに経年的に参加してきた彼女は、国内の映画祭で何度も受賞している実力派として知られる。ミャンマーの児童労働の現実を描いた『Now I'm 13』は、第4回ワタン映画祭の最優秀ドキュメンタリー賞の受賞作でもある。

短編のドキュメンタリー作品がこうした新潮流から生まれてくる作品の大部分を占めていることは先に述べた通りである。しかしながら、まだごく少数ではあるが、海外の映画祭で評価されるような長編作品も制作されてきている。その旗振り役とも言えるのがティーモーナイン監督であろう。彼もまたヤンゴン映画学校の最初期の受講生であり、チェコのFAMUにも留学して研鑽を積んだ。彼が監督した90分尺の長編ドキュメンタリー『ナルギス——時間が止まった時』(英語題:Nargis: When Time Stopped Breathing)は、2008年5月に巨大サイクロン・ナルギスに襲われた直後のミャンマー南部のデルタ地帯の状況を克明に記録したものである。14万人もの命を奪ったと言われる大惨事に直面して当時の軍事政権は被災地の撮影を禁止した。にもかかわらず、彼ともう一人の共同監督をはじめ上述のトゥートゥーシェイン氏、タイッディー氏、シンデウイー氏らなど、ヤンゴン映画学校に集った新進気鋭の映画人たちは共同でこのドキュメンタリーを制作した。軍事政権下の国内で公開することは難しかったが、この映画は海外で高い評価を得ていくつもの賞を獲得した。2014年には、ティーモーナイン監督は自身初の長編フィーチャー映画となる『The monk』を完成させた。出家の道を歩むか還俗するかを選択に悩む沙弥僧の姿を描いたこの作品も複数の国際映画祭で上映されている。

最後にもう一人、国際映画祭の舞台で活躍するミャンマー出身の映画監督としてミディZ(中国語名:趙德胤)監督に言及しておきたい。ミディZ氏はこれまで紹介してきたような国内映画祭ブームの潮流に属する人々とはかなり異なった背景を持っている。ミディZ氏はミャンマー東北部の中国国境にほど近い町ラーショーの華人一家に生まれた。16歳で台湾に留学してから同地に居住しており、映像作家としての訓練も台湾で受けた。2011年に、自身の帰郷体験を元にした初の長編作品『Return to Burma』(中国語題:歸來的人)を発表して以来、2012年の『Poor Folk』(中国語題:窮人。榴槤。麻藥。偷渡客)、2014年の『Ice Poison』

(中国語題: 冰毒)と国際的に高く評価される作品を立て続けに世に出している。これらの作品はミャンマーの周縁部に位置する中国やタイとの国境地帯を主な舞台としており、人身取引や麻薬密輸といった越境犯罪と隣り合わせに生きる人々の日常を活写している。また、映画の中の登場人物の多くは華人であり、彼らの間では中国語が話される。これらの要素は彼の映画に、一口に「ミャンマー映画」とは括り切れない混成的な性格を与えている。

ミャンマー国内の新潮流が主に欧米との関わりの中なかで生まれ、その作品群が「ミャンマー映画」として国外へ向けて発信されるのに対し、中国語映画圏の中に誕生したミディZ監督の作品はミャンマーを舞台としていながら、それ自体の内側に「ミャンマー映画」という区分を掘り崩す越境性をはらんでいる。いずれも、ミャンマーが長いこと疎遠であった外世界との関係性を結び直しつつある結果として生まれてきた作品たちであると言えよう。と同時に、このような良質の映画作品は、ミャンマーと世界との関わりを今後いっそう密に築いていくうえでの指針や基礎となりうるものであるようにも思われる。国内外の映画祭は映画人と作品の越境と交流を促し、新たな創作意欲への刺激を提供し続けるはずである。

参考文献

- Mon Mon Myat. 2015. "Sowing the Seeds for a Human Rights Film Festival in Burma," in *Setting Up a Human Rights Film Festival, vol. 2: An inspiring guide for film festival organisers from all over the world*, edited by Hana Kulhánková, Matthea de Jong, María Carrión, and Ryan Bowles Eagle, pp.166-176. Prague: Human Rights Film Network.
- Rhoads, Nikki. 2015. "This land is his land: Lamin Oo '10 returns to Myanmar for social documentary work," *News@Gettysburg* (Online) on January 28, 2015.
http://www.gettysburg.edu/news_events/press_release_detail.dot?id=2899a7f1-241c-455c-b431-869e9e947504 (October 29, 2015, retrieved)
- Tin Htet Paing. 2015. "At Wathann Film Festival, an Eye for the Independent," *The Irrawaddy* (Online) on June 10, 2015.
<http://www.irrawaddy.org/feature/at-wathann-film-festival-an-eye-for-the-independent.html> (October 29, 2015, retrieved)

長田紀之 2013「客体から主体へ: ミャンマー映画の再生(総特集 混成アジア映画の海——時代と世界を映す鏡)『地域研究』(京都大学地域研究統合情報センター)13(2): 329-334.

参考Webサイト

- ワタン映画祭 (Wathann Film Festival)
<http://www.wathannfilmfestival.com/>
<https://www.facebook.com/wathannfilmfest>
- 自由芸術映画祭 (The Art of Freedom Film Festival)
<https://www.facebook.com/FreedomFlim>
- 人権と人間の尊厳の国際映画祭 (Human Rights Human Dignity International Film Festival)
<http://www.hrhdiff.org/>
<https://www.facebook.com/HRHDIFF>
- アンド・プラウド・ヤンゴンLGBT映画祭 (&PROUD Yangon LGBT Film Festival)
<http://www.andproud.net/>
<https://www.facebook.com/andPROUD/>
- ヤンゴン映画学校 (Yangon Film School)
<http://yangonfilmschool.org/>
- タグフィルムズ (Tagu Films)
<http://tagufilms.com/>
- メモリー! 国際映画祭 (Memory International Festival of Heritage Cinema)
<http://memoryfilmfestival.org>